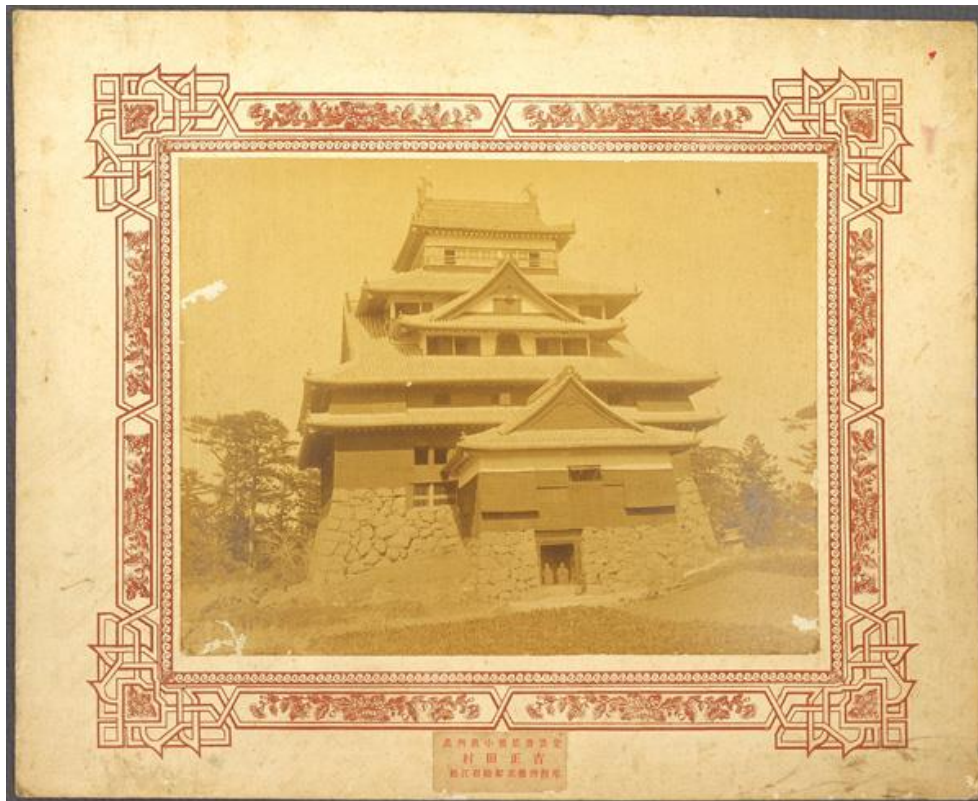


松江城天守が写る新出写真-皇太子嘉仁親王ら明治 40 年山陰道行啓一行-

はじめに



史料調査課が行った松江市内の旧家の史料調査により、松江城天守が写る新出写真 2 枚（【写真 A】 【写真 B】）が確認されたので、紹介しておきたい。【写真 A】は、明治 27 年（1894）の松江城天守大修理後間もない時期に撮影したと考えられるもの、【写真 B】は、天守を背景とした明治 40 年（1907）の山陰道行啓時と考えられる集合写真である。

【写真 A】 明治大修理後の最も古い天守の姿



【写真 B】海軍通常礼服姿の皇太子嘉仁親王・東郷平八郎ら明治 40 年山陰道行啓一行と地元有力者との集合写真

【写真 A】 -明治大修理後の最も古い天守の姿-

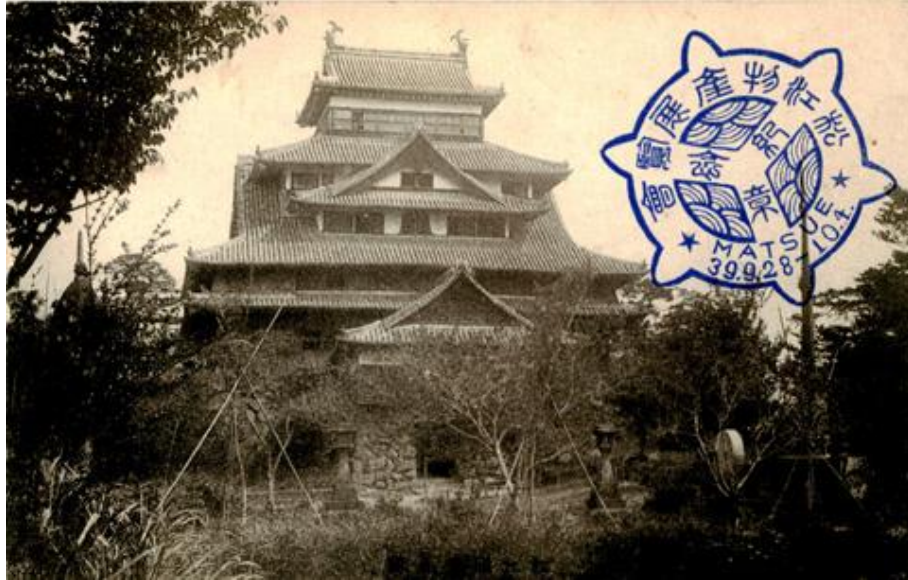
松江城天守が写る古写真については、[松江市史編纂コラム第 49 回「松江城天守幻視考」](#) (PDF:978KB) や『[松江市歴史叢書](#)』9号、『[松江市史](#)』[別編 1「松江城」](#)などで紹介させていただいた。その後、平成 31 年に新たな古写真が確認され、明治 27 年の大修理期間中に撮影されたものと推定されたが（木下誠 2020「新たに確認した松江城天守古写真-ガラス窓に改修された天狗の間-」『[松江歴史館研究紀要](#)』第 8 号）、この新たに確認できた古写真を加えても、明治 27 年の松江城天守大修理以前の天守の姿が確認できる写真は今のところわずか 5 枚である。

明治 27 年の大修理では天守外観を少なからず変えており、昭和 25 年から同 30 年にかけての昭和大修理では、古写真【参考写真 1】や「竹内右兵衛書付け」（松江市指定文化財）などを参考に旧状に復されたことが分かっている（『重要文化財松江城天守修理工事報告』）。



【参考写真 1】（『松江市史』別編 1「松江城」：写真 13-6）松江城古写真〔推定：明治 25 年 8 月頃から明治 27 年 6 月 10 日の間の撮影〕

『松江市史』別編 1「松江城」の編集時に、明治大修理後の天守が写る写真も多く収集しており、これまで、「松江物産展覧会」「（明治）39.9.28-10.4」の記念スタンプが押された絵葉書写真【参考写真 2】などが、明治大修理後の天守の姿を伝える最も古い頃の写真であった。明治 40 年の山陰道行啓頃から松江の絵葉書や写真帖などが相次いで発行されており、天守の写真も多く残っている。【写真 A】には撮影日時や内容に関する情報は一切記されていないが、ほぼ同じ地点から撮影された【参考写真 2】と比べると、【写真 A】では天守前方に目立った木や石造物は見え、一目で【参考写真 2】より古い時期の撮影と分かる。



【参考写真2】（『松江市史』別編1「松江城」：写真13-10）松江城天守（松江物産展覧会記念絵葉書）〔明治39年9月28日記念スタンプ〕

【写真A】は縦20.3センチ、横26.3センチの印画紙（鶏卵紙か）に焼き付けられ、厚紙の台紙（縦32センチ、横40センチ）に貼り付けられている。台紙の写真貼付枠の四周には連続した渦文や幾何学的な線と花をあしらった文様が朱色で印刷されており、下端中央には「長州萩小橋筋青雲堂」「村田正吉」「松江市殿町京橋西河岸」と朱色印刷した紙（縦2.5センチ、横5.4センチ）を貼る。

撮影者の村田正吉は、村田青雲堂（本名慎吾、上野彦馬の門弟）の子で、「長州萩小橋筋青雲堂」「松江市殿町京橋西河岸」とあるように、萩の小橋筋で開業しながら、松江市殿町京橋西河岸で写真師として営業を行っていた（島根県写真協会写真史編集委員会1988『島根県写真史』）。

【写真A】をもう少し詳しく見てみよう。全体にセピア色で、画像は少し薄くなっているが、木立など遮るものもなく天守全体が鮮明に写し出されている。3階華頭窓両側の窓、4階の窓などの特徴は、明治大修理後の姿を示している。付櫓（つけやぐら）前方には土木工具らしきものが写ることから、整地の途中のようにも見える。漆喰壁や板張り、屋根瓦には傷みや歪みなどが見受けられず、板壁や懸魚（げぎょ）など木質部分に施された着色も色落ちしていないようで、あくまでも印象ではあるが、明治27年の大修理後まもない時期に撮影された写真のように見える。

写真には4名の人物が確認でき、付櫓の鉄扉内に2名、鉄扉外に1名、いずれも椅子に腰かけ威儀を正し、何らかの記念のために写っているように見える。天守台の西側（写真左）の人物は一人立ち姿である。今のところいずれの人物も特定はできていないが、装い新たになった天守とともに、写真の所有者家の誰か、或いは天守大修理に関係した人物の可能性も考えられる。村田正吉による撮影は、所有者家が村田写真館のあった「松江市殿町京橋西河岸」の近くであることとも関係しているのかもしれない。

写真全体に日の影が明瞭に確認でき、屋根の影は一様に左上から右下に延びている。天守入口側はほぼ真南に向いていることから、ある晴れた正午頃の撮影と分かる。今回は確認できなかったが、鉄扉内で腰掛ける人物の日の当たり具合や、屋根の影位置（太陽の角度）などから、季節は秋から冬にかけてかもしれない。影の形を丹念に確認していけば、季節や時間等もさらに詳しく分かるのだろう。

【写真 B】 -皇太子嘉仁親王・東郷平八郎ら明治 40 年山陰道行啓一行-



【写真 B】は、松江城天守西面の天守台石垣前で撮影された集合写真である。縦 15.4 センチ、横 19.7 センチの印画紙に焼き付けられ、厚紙の台紙（縦 27 センチ、横 33 センチ）に貼り付けられている。台紙の写真貼付枠の四周には、青灰色地の上に直線的な枠に唐草を配した文様が印刷されている。

天守 1 層目の閉じられた窓は全てガラス窓と確認でき、昭和大修理直前の天守西面の写真【参考写真 3】と比較しても、【写真 B】に写る天守西面の姿は明治大修理後の姿と確認でき、明治 27 年以後の撮影と分かる。

【参考写真 3】『松江市史』別編 1「松江城」：写真 13-93）修理直前の天守西面、各階の窓はガラス窓

【写真B】に写る人物たちの姿を見てみよう。最前部は地面に胡坐で座り、制服（統一の服装）に着帽姿で左右に分かれて座る。1列目は椅子に座り、中央の1名を除けば制服に着帽姿である。また、中央部の6名は前面に地面に座る人がおらず開けてあることから、1列目の中でも重要な人たちであることが分かる。2列目は立ち姿で、中央寄りに制服に着帽姿、両側には洋装姿が並ぶ。3列目は椅子に座っているのだろうか、洋装姿が多く、和装姿なども入り混じる。4列目以後は立ち姿で、羽織袴の和装姿が多く、洋装姿や軍服などの制服姿も入り混じる。写真に写る人数は、最前部で地面に座る胡坐姿が25名（右側13名、左側12名）、1列目（着座姿、左端の椅子席は空席）が25名、2列目（立姿）が26名、3列目（着座か）が32名、4列目以後に157名、合計265名である。この写真では、最前部、1列目、2列目の制服・着帽姿の人物群、計66名が特に目を引くが、着用する制服（フロックコート）は、「海軍服制」（明治29年10月6日制定、海軍省軍務局編1905『海軍服制』水交社）によれば海軍の通常礼服であり、特に1列目中央部の人物に付けられた袖章（金線）は、写真では線条がはっきりしないものの、服制上、将官、佐官ら高位の軍人であると見受けられる。通常礼服の着用基準は「海軍服装規則」（明治29年11月20日制定）第4条に20項目以上にわたり細かく規定されており、この写真が一地方都市である松江で撮影されたものとしては極めて特異なものであることを示している。



【写真B】部分図1

では、この【写真B】は何を撮影したものなのだろうか。写真が確認された当初、史料調査課内では松江城の天守台石垣の前に並ぶ制服・制帽姿の人物群を「警察官では？」などと言いついてはいたものの、よく分からなかった。今回のコラムで【写真A】に併せて新出写真として紹介することになったことから、撮影日時や内容、撮影者などは分からないまま、明治大修理後の天守が写る写真として文章を簡単にまとめている。自宅で文章を書き終えパソコンを閉じながらぼんやりと写真を見ていた時に、ふと1列目中央付近に座る人物は東郷平八郎（最初は乃木希典と勘違いしていたが…）ではないかと思いついた。とすれば、写真の前列部を占める制服・着帽姿の人物群約70名は明治40年5月の山陰道行啓一行ではないだろうか？、1列目中央に座ることができる人物は皇太子嘉仁親王ではないだろうか？、行啓一行の後ろに写る人々は地元の有力者ではないだろうか？、と連想してしまった。自分なりにこの想定に驚きつつも、確信があったわけではなかった。

次の日、史料調査課で西尾克己さんと、近現代史部会担当の村角紀子さん、高橋真千子さん、近現代史部会長の竹永三男先生に山陰道行啓時の写真ではないかと伝えると、半信半疑ながらご賛同いただき、関係する資料を紹介いただいた。写真に写る人物のうち、1列目中央の洋装姿（燕尾服か）でシルクハットを持つ人物は松永武吉島根県知事（知事在任：明治37-41年）、2列目左から2人目の白髭の人物は福岡世徳松江市長（市長在任：明治22-44年）であることが同時期の写真などから確定でき、松永知事、福岡市長ともに行啓時期は在任期間と重なっている。

明治40年山陰道行啓に関する基本資料（同時代資料）は、島根県公文書センター所蔵の「行啓二関スル書類」23冊、明治40年5月の「山陰新聞」、明治40年8月に島根県行啓事務委員長・藤本充安（島根県第一部長）が公式記録としてまとめた『皇太子殿下島根県行啓日誌』（以下『行啓日誌』）、明治40年9月に角金次郎がまとめた『記録山陰道行啓録』などであるが、明治40年11月に報光社が発刊した『行啓記念：春日の光』には行啓随行員の顔写真も掲載されており、参考となった。『行啓日誌』には、島根県側で迎えた供奉員及び来賓の氏名や人数が記されており、それによれば、供奉員は東宮職の104名、来賓は「列外供奉員」とある海軍大将・東郷平八郎、海軍大佐・牛田従三郎を始め81名を数える。山陰道行啓時の写真という推定が正しければ、恐らく【写真B】の前方に写る海軍通常礼服を着用した66名は、皇太子及び皇太子に随行する供奉員たち（全員ではない）、東郷平八郎ら列外供奉員であると考えられる。

しかしながら、上記の行啓関係資料には皇太子の分刻みの行動や行啓に関連した様々な出来事が丹念に記録されているにも関わらず、「皇太子と行啓随行員、地元有力者たちが礼服を着用し松江城天守の前で記念撮影を行う」、といったような行動スケジュールや記録を見つけることはできなかった。また、合計265名の人物が写り、撮影を共にした地元の人々にとっては、生涯最大級の誉であるにも関わらず、松江の歴史に詳しい方々にも確認したが、これまで世に知られることはなかった写真のようである。写真や台紙に注記はなく、所蔵者家に伝えもない。史料調査時に見つかった写真群の1枚であり、特別な扱いがなされていたわけではなかった。台紙の装飾もシンプルで、撮影者や写真館などの表示もなく、何かと不思議である。

撮影に直接関係する情報は行啓関係資料中に確認できなかったものの、明治40年5月24日付の「山陰新聞」には、「御発車前撮影：昨日午後一時半松江中学校へ行啓前において殿町大野写真師を招き御馬車並に乘馬騎兵御旅館の撮影ありたり」の記事が載っている。この記事から、5月23日には大野写真師が御旅館撮影のためにカメラを携え、松江城山内に入っていたことが分かる。現在、宮内庁書陵部には、「島根県下奉迎ノ図（皇太子）／松江市大野政助写／明治」と題する松江を中心とした山陰道行啓記録写真17枚が存在し（書陵部所蔵資料目録・画像公開システムで公開）、その中に、「松江城山入口緑門之景」「松江城山緑門前御列奉拝ノ図」「松江城三ノ丸前紀年絵葉書販売所」「松江城山入口緑門前二於ケル一般奉送者奉送ノ景」「松江御旅館」「松江城山入口緑門前二於テ玉車奉拝之図」と裏書された写真が含まれている。これらの写真に【写真B】は含まれていないが、大野写真師（政助）により撮影された玉車（御馬車）、乗馬騎兵（御列）、松江御旅館の写真が宮内庁に現存していることは、5月24日付の新聞記事を裏付けられる。なお、県公文書センター所蔵「行啓二関スル書類」によれば、松永知事から皇太子に献上された『島根県写真帖』作成のために大野政助と大野義守（政助の息子か）が島根県より写真撮影を請負っており、政助は行啓に関する写真を公に撮影できる立場にあったのではと考えられる。

では、大野写真師（政助）がカメラを携え松江城山内に入った5月23日の、皇太子の行動履歴はどのようなものだったのだろうか。[【別表】\(PDF:373KB\)](#)は、松江御旅館にお泊りになった明治40年5月23日から25日の皇太子の行動履歴を『行啓日誌』より作成し、「山陰新聞」、『山陰道行啓録』の関係記事を加えたものである。『行啓日誌』によれば、5月23日は午前も午後も晴、皇太子は予定通り午前9時に松江御旅館を出発（御出門）、島根県庁へ向かった。皇太子御出門の際、正門内で特別奉拝を賜った者は151名、正門外で奉拝を賜った者は397名とある。県公文書センター所蔵「行啓二関スル書類」によれば、正門内で特別奉拝を賜った者は、「緑綬、藍綬褒章ヲ有スルモノ」「赤十字社特別社員」「奉迎準備二関係アル重ナル委員」「御旅館所在地ノ廃兵」とある。5月23日付「山陰新聞」は、「特に奉拝を賜ふ者」「特別奉拝者心得」と題した記事を載せ、奉拝者は午前8時までに城山へ集まるよう指示されていたことも伝えている。

皇太子は、この日午前中は島根県庁、県立師範学校を訪れ、午前10時45分に松江御旅館に帰着している。そして午後2時になると再び県立松江中学に向けて出発するが、新聞記事によれば、午後1時半に大野写真師（政助）が御馬車、乗馬騎兵、松江御旅館の撮影を行っている。【写真B】に写る皇太子・随行員・地元有力者（正門内での特別奉拝者など）と、写真師（大野政助）が同時に松江城山内に滞在し、記念写真を撮影できる可能性がある時間帯があるとすれば、5月23日午前10時45分から松江中学校に出発する午後2時までの間が有力だろう。（もっとも、午前9時に皇太子を奉拝した人々のその後の行動記録は残っておらず、あくまで推測である。）

ところで、明治40年5月の山陰道行啓とは、当時の人々にとってどのようなものだったのだろうか。明治5年から明治天皇の地方行幸（巡幸）が始まったが、島根・鳥取両県の度重なる請願にも関わらず天皇のおでましはなかった。そのような中で、明治33年からは皇太子嘉仁親王の地方行啓（巡啓）が歴史地理の御見学を目的として始まっており、日露戦争後に行われた山陰道行啓は、明治天皇の名代として行われた公式の地方行啓であった。皇太

子による山陰道への行啓は、明治天皇の地方行幸がかなわなかった島根・鳥取両県民にとってみれば、長い間の悲願が達成された慶事だったのである。県知事を頂点に官民挙げての奉迎準備が進められ、鉄道・道路・電気・電信・電話といった社会資本整備が進むことで、地域の近代化が加速する契機となり、宍道の木幡久右衛門、今市の遠藤嘉右衛門など地域の有力者たちも、休憩や宿泊用の施設を新築するなどして迎えている。当時の人々にとって、山陰道行啓とは、空前絶後の奉迎行事だったのである。

最後に、【写真B】の人物比定はどこまでできるのだろうか。皇太子嘉仁親王や東郷平八郎、行啓時の東宮職高官などの写真は今日複数伝わっていることから、【写真B】に写る人物と比較してみたが、なかなか難しく確信は持てない。函簿（ろぼ：御馬車を守る近衛騎兵の儀杖隊が加わった御列）での席



順なども参考に、以下は問題提起のつもりでの私見である。1列目洋装姿でシルクハットを持つ人物は前述のとおり松永武吉島根県知事である。写真に向かって松永知事の左隣はやや隙間があって皇太子嘉仁親王、その左隣は東郷平八郎である。東郷の左隣2名は不明で、その左隣は中山孝麿東宮大夫ではないかと考えた。写真に向かって松永知事の右隣は木戸孝正東宮侍従長、その右隣は村木雅美東宮武官長ではないかと考えた。

【写真B】部分図2

史料調査課内では地元有力者についても検討を進めているが、人数も多いので今回は割愛する。明治40年5月という限定された時期に、松永島根県知事、福岡松江市長をはじめ、約200名もの地元有力者が集った写真が確認されたことは、島根県、松江市の近代史を研究していくうえでも大きな発見である。1人でも多くの照合を行い、また詳しく報告できることを期待したい。

情報提供のお願い

以上、松江城天守が写る新出写真2枚について紹介しましたが、とりわけ【写真B】は、「海軍通常礼服姿の皇太子嘉仁親王・東郷平八郎ら明治40年山陰道行啓一行と地元有力者との集合写真」というやや驚きの紹介を行ったところです。推定が正しければ、松江城天守という藩政時代の象徴的な建物の前で、皇太子嘉仁親王と随行員、地元の有力者が同時に写るといって、稀で貴重な写真資料です。近代天皇制を考えるうえでも、皇太子嘉仁親王の考え方や性格がこのような写真が撮影された背景にあるのでしょうか。ご叱正を覚悟しつつ、識者の皆様のご教示をお待ちしています。

(松江市歴史まちづくり部史料調査課／稲田信／令和3年6月29日記)